

ヤーシ・オスカーの二重制期ハンガリーをめぐる 1920年代の議論と「ユダヤ人」・「民主主義」

辻河典子

はじめに

本稿では、世紀転換期ブダペストで社会改革派の知識人として活動したヤーシ・オスカー(1875-1957年)のハンガリー社会論における「ユダヤ人」の表象を分析することを通じて、彼の「ユダヤ人」論の特徴を考察する。

ヤーシ・オスカーは1875年にナジカーロイ(現在のルーマニア領カレイ)¹でユダヤ系の家庭に生まれ、幼少期に家族全員がカルヴァン派に改宗した。1900年1月に雑誌『二〇世紀』を創刊、翌年には社会科学協会の設立に関わって書記長となる。同協会は当時のブダペストにおける進歩派知識人の代表的なサークルだった。1905-06年の政治危機以降、ヤーシはフランス社会学や社会主義など様々な思想の影響を受けながら、「封建制」が残るハンガリー社会の近代化を求めて政治活動に傾倒する。この過程で彼は「(市民)急進主義[a polgári] radikalizmus」を掲げ²、1914年に全国市民急進党を結成した。同党は後のカーロイ・ミハイ政権に参画するが、実質は知識人サークルだった。1918年10月の共和主義的な「ヒナギク革命」で成立したカーロイ政権では少数民族担当大臣となり、国内の少数民族との交渉でハンガリーの歴史的領土内の少数民族の領域自治を認める「東のスイス」構想を示すが、諸民族の独立や協商国の介入、政権内の対立の中で試みは挫折して翌年1月に辞任する。

1919年3月21日のタナーチ革命で成立した共産主義政権に多くの知識人が協力する中、共産主義に否定的だったヤーシは5月にウィーンへ亡命した。8月初めのタナーチ政権崩壊後、ウィーンはハンガリー国外への亡命政治家・知識人の拠点のひとつとなり、ヤーシはその主要人物としてカーロイを中心とする革命理念の再現を目指した。だがホルティ体制のハンガリーが国際的に承認される一方で、亡命知識人たちの活動は限界を迎え、ヤーシは1925年にオーバーリン大学(オハイオ州)の政治学の教授としてアメリカ合衆国に渡る。その後の彼は第二次世界大戦期の反ファシズム活動以外に積極的な政治活動を行わなかったが、合衆国を拠点に国際政治情勢への批評など数多くの論考を発表した。

ハンガリーにおける彼に関する先行研究は、彼が同化ユダヤ人家庭に育った出自を持ち、かつ共産主義に否定的であったがゆえに、両大戦間期から現在に至るまで同国の政治的文脈の影響を強く受けてきた³。本稿の議論との関連では、ジュルジャック・ヤノシュの研究が挙げられる。彼は『ハンガリーにおけるユダヤ人問題』の中で、ヤーシの「ユダヤ人」論を1906-1919年、亡命初期、1925年の渡米以後の時期に区分し、1920年代初頭にヤーシが「富豪ユダヤ人」と「ユダヤ資本の新聞」への批判を形成し、以後も継続されたことが指摘されている⁴。従来の研究ではヤーシの政治理論が亡命前後で一貫していると見なして議論を進める傾向が強いが、同書で

は亡命前後でのヤーシの主張の変化も考慮した点で特徴的である。

本稿の議論はこの1920年代初頭に形成された「ユダヤ人」批判の内容の検討が課題である。ハンガリーでは第一次世界大戦直後の革命政権（特にタナーチ政権）にユダヤ系知識人が多く関与したことが歴史的領土解体のスケープゴートとされた。その経緯と対比させ、ユダヤ的出自を持つがゆえに彼本人も革命後に批判対象とされたヤーシが、同じ時期に19世紀後半以降のハンガリー社会を同時代にどのように評価したのかを検討したい。ヤーシの批判の根底に「民主主義」が関係するという筆者の見解は、先述したジュールジャークの主張に通じる箇所があるが、彼自身はヤーシの「ユダヤ人」論ではそこまで踏み込んで言及しておらず、また問題点についての議論が同書ではなされていないため、その点についても併せて指摘する。さらに「ユダヤ人」の定義は論者の政治的・思想的立場によって定義は可変的でありうるため⁵、ヤーシの「ユダヤ人」論の考察においても、彼が「ユダヤ人」という用語を通じて表象した内容の分析が必要であり、それを通じて、彼の「ユダヤ人」論の複雑さをより一層浮かび上がらせることを目指す。

本稿の構成は、まず対象とする時期のハンガリーにおける「ユダヤ人」の状況を時代背景としてまとめる。次に、ハンガリーの「ユダヤ人」に関する1920年代のヤーシの議論を、前提として亡命前の「ユダヤ人問題」に関する見解をまとめた後、1920年代前半の1918-19年の革命に関する論考、そして1929年に出版した『ハプスブルク君主国の解体』を中心に整理する。最後にその分析内容を手がかりに、彼の「ユダヤ人」という表象と彼が理想とした「民主主義」との関係を指摘したい。

1. 19世紀後半から1920年代にかけてのハンガリーにおける「ユダヤ人」

1-1. 19世紀後半から第一次世界大戦期まで

ハンガリーにおける「ユダヤ人」解放の試みは1825-48年の自由主義派貴族による三月前期の改革期の中で1830-40年代から始まり、1867年に法の下での個人の平等が宣言されて「ユダヤ人」の解放が実現される⁶。ハンガリーでの「ユダヤ人」解放は西欧の場合とほぼ同様に同化のモデルが採られた⁷。

ハンガリーにおける反ユダヤ主義は1919年の革命崩壊以後数年にわたる状況に比して限定的ではあったが、1870年代の政治・経済危機⁸を背景に生じた。その先駆けがイシュトーツィ・ジェーゼーである⁹。さらにハンガリーではティサエスラールでの事件を契機に1882年から翌年にかけて反ユダヤ主義が高揚し、1883年夏以降はポジョニ（現ブラチスラヴァ）から始まった反ユダヤ暴動が各地に拡大した¹⁰。同年秋には全国反ユダヤ党が結成されたが、政治的影響力を欠き、反ユダヤ主義運動と共に1890年代初めには勢いを弱める¹¹。しかし反ユダヤ主義的な思考様式はその後にも社会に残り、世紀転換期に出現した新保守主義思想（政治的カトリシズムなど）に継承されていく¹²。

なお、ヘルツルに代表されるようにシオニズムの運動・イデオロギーを基礎づけた人物の中にハンガリー出身の「ユダヤ人」が相当数含まれていた一方で、ハンガ

り一国内でのシオニズム運動は第一次世界大戦期までほとんど機能しなかった¹³。

1-2. 1918-19年の両革命期から1920年代の状況

第一次世界大戦に敗れたハンガリーは歴史的領土の3分の2を喪失した。世紀転換期以降に活躍したユダヤ系知識人の多くが1918-19年の革命に関与したため、革命崩壊後の反革命期には「ユダヤ人」が歴史的領土解体のスケープゴートとされて¹⁴「白色テロル」¹⁵の犠牲者も多かった。「キリスト教国民」という国民像の強調と「ユダヤ人」への抑圧的な政策が採られ¹⁶、その象徴が1920年のいわゆる「定数条項」法で、高等教育機関への「ユダヤ人」の入学比率が実質的に制限された。

1921年に首相となったベトレン・イシュトヴァーンは、教育文化相のクレベルスベルク・クノーと共に同法の緩和に取り組んだ。これには経済再建の問題も関係しており、大土地所有とユダヤ系大資本及び官僚による体制が補強された¹⁷。1928年に「定数条項」法は緩和されたが¹⁸、依然として「ユダヤ人」市民層の子弟には不利だった。両親の職業が選考基準に採用されたが、傷痍軍人や公務員、地主の子弟の方が、「ユダヤ人」の多い商工業者の子弟よりも有利だったからである¹⁹。

第一次世界大戦末期からの政治・経済の混乱が収束に向かった1920年代半ばにはユダヤ教団の活動も許容されるようになった。上院設立に関する法案（1926年制定）では正統派と近代主義派に別個の代表権が保証されて議会の代表権を獲得した²⁰。この代表権付与は「ユダヤ人」の社会的地位向上に見える一方、革命崩壊後に進化した「ユダヤ人」の異化、すなわち彼らをマジダル系住民とは異なる存在と見なす動きが議会制度上で固定化されたとも解釈できる。

2. ヤーシの「ユダヤ人」論

2-1. 亡命前の「ユダヤ人」論

ヤーシは在ハンガリー時代の政治活動を行っていた時期から君主国及びハンガリーの「ユダヤ人」に関しても時折言及をしていたが、本節では革命前に彼が同問題について最も詳細かつ統合的に論じた²¹とされる1917年5月に雑誌『二〇世紀』が知識人らに対して行った以下の3項目²²に関する調査における彼の回答を参照し、1920年代における議論の前提としたい。

1. ハンガリーにユダヤ人問題は存在するか。もしあるなら、何にその本質を見るか。
2. 何がハンガリーのユダヤ人問題の諸原因なのか。ハンガリー社会の諸現象、ハンガリーのユダヤ人、非ユダヤ人それぞれの社会的関係、機関、所有、慣習がユダヤ人問題の喚起において役割を演じるものであるのか。
3. 何にあなたはハンガリーのユダヤ人問題の解決を見るか。社会あるいは法の諸改革を必要だと考えるか。

ヤーシは「ユダヤ人問題」が存在するという立場だったが、ハンガリーでは農業問題や少数民族問題、行政問題が存在するように、「ユダヤ人問題」が「ユダヤ人問題」と

して存在するのではないと主張し²³、「ユダヤ人問題とはすなわち、ある美学的・宗教的・世界観的そして民族的²⁴な——歴史のであり、かつ生物的ではない意味でこの単語 faji を用いているが——諸々の摩擦による複雑な集団対立以外の何物でもない」²⁵と述べた。

そして「ユダヤ人」への諸批判を踏まえ、1000年にわたってゲッターで隔離されてきた「ユダヤ人」に必要な属性だが、支配するキリスト教文化が異質、不快あるいは不愉快だと見るような属性が「ユダヤ人」の圧倒的多数の中でもたらされたと指摘する²⁶。そして典型的なマジルの都市文化がまだほとんど存在しないことを明らかにし、ハンガリーの貴族が都市文化と距離を置き、農民は強制的な同化（マジル化）に晒されている状況では「ユダヤ人」の側でも文化活動で相容れないと分析する²⁷。同時に彼は、少数民族問題の本質とはハンガリーにおいては少数民族の農民大衆から近隣の大地所有者や貴族の公務員に対する経済的・行政的反対であることから、「ユダヤ人問題」と少数民族問題との同族性も指摘した²⁸。

「ユダヤ人問題」の解決法としては、キリスト教社会の工業化、都市化、全ての精神運動における一層の参加を試みるか、あるいは「ユダヤ人」に対して国民の社会から感覚的・美学的に離れていることを弱めるかという要素の影響が、「ユダヤ人問題」を弱めることができ、そして次第に排除することができる²⁹と述べている。そして彼はその動機として、ハンガリーの「民主主義」化と共に起こることと、「ユダヤ人」の身体的・道徳的・精神的向上と共に起こることを挙げた³⁰。但し、彼はハンガリーの「ユダヤ人問題」が何らかの形でユダヤ少数民族問題の緊張をもたらすとは考えておらず、立法機関によって「ユダヤ人」の自然な同化の過程を速めたり強めたりする必要がある、あるいはそれが可能であるとも考えていなかった³¹。

また、彼は「ロシアの民主主義は、西側の民主主義の大部分が解決したのとちょうど同じように平和裡な同化の精神においてユダヤ人問題を解決するであろう、そしてこの下で中欧を、第一にハンガリーをユダヤ人問題の最終的な解決において解放するであろう」³²と述べて、二月革命が起きて間もないロシア革命への期待を窺わせた。彼はこの解決過程のために特別な法律や社会的な機関は必要ないと考えていた。代わりに、キリスト教社会が全ての市民に対してより本物の「民主主義」を、より尊敬に値する法秩序を、より公平に上手くいく可能性を与えることを求め、また「ユダヤ人」は近代人文主義と哲学の精神において、ますます高まっている教育、ますます規律ある方法、我々の共通の国民的・国際的文化のますます真の理解と嗜好と共にあることを求めた³³。

以上から、ヤーシは「ユダヤ人問題」を社会問題の一環として捉え、「民主主義」を通じたいわゆる市民社会の実現によって解決されると考えていたことが分かる。

2-2. 1920年代のハプスブルク君主国論より

2-2-1. 「ユダヤ人」と経済

社会問題の一環としての「ユダヤ人問題」という彼の認識は1920年代末になっても継承されていた。『ハプスブルク君主国の解体』（1929年）でも、彼は「ユダヤ人

の権力（高利貸・経済的搾取・狂信的愛国主義の強化）からの何某かの有害な効果は民族的な問題では全くなく、社会の病理であった」³⁴と記した。

ヤーシは君主国の解体原因を国内の社会的・経済的後進性に求め、そこから分離主義的な運動が生まれたと考えた。そして、ハンガリーでは封建的な大土地所有制の保持などの原因で地域間格差が大きく、国家経済として近代的な発展ができなかったとした。そのため、資本主義は君主国内の民族意識や排他主義を誘発し、民族対立を深刻化させたものとして否定的に描かれる³⁵。そして資本主義と「ユダヤ人」との間に密接な関係があったとした³⁶。「大金融資本家を罵ることはユダヤ人を罵ることと見なされていただけでなく、小規模な職人技や商業が圧倒的多数の巨大産業企業によって苦しんだり、何千もの自立した経済主体の崩壊に繋がったりするような痛ましい過程全てを罵ることも、ユダヤ人を罵ることだと見なされていた」³⁷とも述べている。

その一方で、彼は「君主国のどの国においても、自分たちの政治的・社会的スタイルを形成し、また西欧の大きな国々でのように、その国が発展するのを導いてくれることができたような、真に自覚した資本家階級は生じなかった」³⁸と西欧的な資本主義化がハンガリーのみならず、君主国全体で失敗したと考えていた。その失敗は、資本主義にもとづいた市民社会形成、すなわち彼が理想とした「民主主義」の実現が君主国内では不可能だったとヤーシが考えていたことに繋がると考えられる。

さらに彼は資本主義と封建貴族階級との関係にも注目し、「君主国の統一と団結にはとても有効な力となった」³⁹としている。二重君主国においては、まずは封建貴族階級とそれに付随した金融資本主義との硬直化した階級利害によって全国家の政治組織が動かされており、この封建的な雰囲気は君主国の全ての知的・道徳的・政治的背景を機能不全にし、全ての分離主義的傾向の焦点となった⁴⁰と述べた。また「外国の読者に対して、君主国における特有の道徳的・精神的雰囲気、この封建主義と聖職権主義と高利貸の資本主義との奇妙な混合を描写するのは非常に困難である」⁴¹と断定する。封建貴族階級に対抗する形で資本家が成長してきた西欧を念頭に置きながら、封建的利害関係による資本主義と封建貴族階級との結びつきが君主国特有の現象であると見なしていたと言えよう⁴²。

2-2-2. 「ユダヤ人」と同化

ヤーシは「ユダヤ人」が同化先の民族へ奉仕することも批判した。国内諸民族の民族意識が成長すると「ユダヤ人」は自分たちを取り囲む民族の言語・慣習に同化するようになり、同化先の民族が国内で指導的な勢力になるとその新しい思想に仕えて「不寛容なナショナリズムと狂信的愛国主義」⁴³を生み出したとする。これについてヤーシは「ユダヤ人のこの態度は、抑圧された諸民族の国家に対する憤激を増大させ、病的なやり方で君主国の分離主義勢力を増大させる反ユダヤ主義の潮流を同時に是認した」⁴⁴と述べる。マジャル化した「ユダヤ人」が非マジャル系住民への同化を促す積極的な主体となったために他の少数民族の反発を招き、君主国解体の要因となったという分析である。例えばユダヤ系資本主義の新聞では非常に露骨な愛国主義的態度やアウスグライヒ推進の論調が取られ、「ハンガリーでは最も声高だっ

た」⁴⁵という。さらに彼は、大多数の日刊紙、特に自由主義派の新聞が「ドイツ人とマジダル人のヘゲモニーのスローガン」の下での、封建的・経済的な階級支配の無節操な道具と化した」⁴⁶として痛烈に批判している。

だがこのようにマジダル化への先鋒役となるのは「ユダヤ人」に限らなかった。ヤーシ曰く、この特徴は「転向者のより一般的な心理の単なる一部」⁴⁷であり、「マジダル化したドイツ人・スラヴ人も非常によく、マジダル・ナショナリズムの最も声高で最も不寛容な代弁者となっている」様子を何度も観察していると記す⁴⁸。そしてこの態度は物質的諸条件やゲッターという伝統的な恐怖の強迫観念によってある程度決定されていたが、それ以上に同化に自然に備わっている過程が「ユダヤ人」に生まれながらの適応能力によって、そして民族の伝統の欠如によって強化されたと考えた⁴⁹。

さらに、この態度の原因をヤーシは「半同化の結果によるユダヤ人の精神の不確定な平衡の中に求めるべきである」⁵⁰とした。彼によると、この「不確定な平衡」により「ユダヤ人は政治的なことに極めて適応的になり、誇張や不寛容に向けた」⁵¹からだ。

このようにヤーシは、同化した「ユダヤ人」がマジダル・ナショナリストとなって非マジダル系住民に対して同化を積極的に促していく主体となったために、非マジダル系住民が反発して分離主義的傾向を招いたと捉えていた。

だが、彼は以下の3点の理由で反ユダヤ主義がハンガリーでは激しくなかったとも捉えていた⁵²。

- ・ハンガリーの農民が謹厳で慈悲深いという特徴を持っていたため。
- ・ハンガリー王国が後進的で政治的・社会的に分化していたため。
- ・制限選挙権と過度に中央集権化した官僚制度の結果、政府の権力が余りに絶対的で、政府に賛同しない運動を全て抑圧しようとしたため。

彼によると、ハンガリーの農民はいかなる宗教的・民族的狂信も抱かず、非常に貧しい「ユダヤ人」が多大な影響力を有した団体を初期の社会民主主義運動があらゆる反ユダヤ主義的傾向から守った一方、大衆の大部分はほとんど組織化されていなかった。さらに、自由主義的傾向が続く限り、マジダル系支配階層は経済的理由だけでなく国内の非マジダル系民族に対するマジダル化の手段として、とても好意的に「ユダヤ人」との協調を受け入れたと彼は考えていた。

マジダル系支配階層が「ユダヤ人」を好意的に受け入れたのは、ハンガリー王国内でのマジダル系住民と非マジダル系住民との人口比が関係する。ヤーシによれば1910年の国勢調査で、マジダル系住民が国内人口全体の54.5%と数字の上で優位を占めたのは、少数民族の側からは紙の上だけに過ぎないとしばしば攻撃が行われたという⁵³。それは、ひとつには行政諸機関による圧力や修正のためであり、またマジダル系の支配からの有利な点を分かち合う目的での「ユダヤ人」の表面上の同化と他の諸民族からひとまとめにマジダル系へと加わった転向者のためであるということが主張された⁵⁴。

ところで、ヤーシはマジダル系支配階層と協力関係にあったマジダル化「ユダヤ人」に対して、オピニオン・リーダー的存在の「ユダヤ人精神労働者」を設定した⁵⁵。彼は「ユダヤ人問題」の合理的解決策について「名誉と善意ある人々の奮起と強化、

そしてユダヤ人の寄生の抑圧である。だが、この抑圧はユダヤ人知的労働者への敬意を高めることと結びついていた⁵⁶と述べており、封建的性格が残るハンガリー社会を「ユダヤ人精神労働者」が主導する形で改革することを望んだことが分かる⁵⁷。その「ユダヤ人精神労働者」とは、君主国内で「真剣に自由主義思想を取り入れ、諸々の少数民族の民族闘争に共感的である重要な少数派ユダヤ人」⁵⁸や「狂信的な愛国主義の潮流と効果的に拮抗していた」社会民主主義諸政党の指導層にいた「少数派ユダヤ人」⁵⁹を指すと考えられ、ヤーシも自身をその「少数派ユダヤ人」に同定していたことは明らかである。

3. 「ユダヤ人」と「民主主義」

3-1. ハンガリーにおける「封建制」批判

本節では、上述したヤーシの「ユダヤ人」批判の意図とその特徴について考察する。冒頭でも述べたようにヤーシはユダヤ的出自を持つ。彼は晩年の回顧録⁶⁰で、故郷の家庭内では啓蒙主義を受容した父親の影響下で宗教が捨棄されており、宗教の違いを社会生活においても意識することがなく、両親が一般的な敬意を受け、近い友人の大部分がキリスト教徒で、ジェントリの家族とも頻繁に交流があったと記している⁶¹。だが、同時に改宗の事実が家庭内で回避される話題だったことも示唆した⁶²。彼は父親が改宗を決めるに至った動機を二つ仮定する。ひとつは自由主義的なカルヴァン主義の方がユダヤの正統派教義よりもずっと父親には身近だったかもしれないこと、もうひとつは、ユダヤ人の生活の障害を見て、もはや信じていない信仰を手放して自分の子どもたちの将来の生活の道筋を障害なきものにすることに躊躇いがなかったことである⁶³。また、父親の唯物論的な冗句に神の加護を求めている母親の姿の記憶にも言及し、彼女が人文主義の自由思想では満たされなかったと推測する⁶⁴。こうした環境で育ったヤーシは成人後も自身の宗教的側面を明示しない傾向にあった⁶⁵。

そのような出自を持つ彼が「ユダヤ人」批判を行ったことはこれまでも注目されてきた。ハナーク・ペーテルは彼のこの傾向を「自己反ユダヤ主義önantisemitismus」と呼び、19世紀末の啓蒙化された国の同化「ユダヤ人」二世・三世には珍しい現象ではなかったと指摘する⁶⁶。ペレ・ヤーノシュはヤーシに関するモノグラフ⁶⁷で、ヤーシら左派の改革派知識人の多くが有するユダヤ的出自と彼らの政治活動との関係に言及した⁶⁸。また、ジュルジャークは、晩年のヤーシが自身の1919-20年頃に見られた反ユダヤ的な記述は圧倒的多数の「ユダヤ人」による「赤色テロル」に対する反発であったとして当時の記述に嫌悪感を示していることを紹介しており⁶⁹、ヤーシが様々な論考を執筆した当時の政治状況など背景事情も考慮に入れる必要がある⁷⁰。

前章で述べたように、彼は「ユダヤ人問題」をハンガリーにおける社会問題の一環として位置づけ、「ユダヤ人」批判を介して、ハンガリーにおける「封建制」と、それと結びついた自由主義を批判した。そこでまず、「封建制」への批判について考察したい。ヤーシは在ハンガリー時代から一貫して「封建制」を「民主主義」の発達の障

害だと見なし、例えば「時代遅れの封建的組織が国における巨大な腫瘤として拡大し、民主的組織と文化的復興へのあらゆる努力を遅らせてしまった」・「真の民主主義的な感情や態度は、封建的絶対主義の下での君主国の後進的な地域では発展できなかった」と述べた⁷¹。また彼は「封建制」の基盤であると理解した教会や貴族による大土地所有制度の解体も主張した⁷²。

また、先述のように、彼は「ユダヤ人」・資本主義・封建貴族階級との結びつきを指摘したが、ハンガリーで資本主義が発展したのはアウスグライヒから大不況期にかけての自由主義的諸政策が取られていた時期であった。彼は19世紀後半のハンガリーでの自由主義について「君主国で自由主義と呼ばれたものは人工の植物に過ぎず、1848年の革命的な貴族や知識人によって導入されて次第に後の資本家の手の中に消えていったものである」⁷³と述べた。そして「大きな経済的利害関係を支配することが、いわゆる自由主義期には何の疑念もなしに国を支配した」⁷⁴と分析する。以上から、彼が自由主義によって「ユダヤ人」金融資本家やマジダル系大土地所有貴族といった特定の勢力が経済的に大きな権益を占めることを招く構図に批判的だったことが分かる。

但し、ヤーシの批判の対象は、ハンガリーにおいて「封建制」と結びついた形の自由主義であり、決して自由主義の理念そのものの否定ではない。例えば英語版の革命回顧録『ハンガリーにおける革命と反革命』の序文で「我々ハンガリーの民主主義擁護者、すなわち自由主義者と社会主義者にとって」と述べており⁷⁵、彼は自由主義と社会主義とがともに民主主義の根底に必要だと考えていた。

また、ヤーシは「君主国での自由主義は、むしろ優れた西欧のモデルの外側の飾り付けや修辭的な定式を取り入れたが、一度も社会の大衆勢力と真の接触を持たなかった」⁷⁶として、大衆との関係の希薄さを批判し、オピニオン・リーダー的存在の「ユダヤ人精神労働者」の創出を目指した彼ら自身の活動と対比させた。

3-2. ポリシェヴィズム批判と「民主主義」

先述のように、ヤーシは「民主主義」にとって自由主義と社会主義が重要であると指摘したが、彼の考える社会主義とは、共産主義（マルクス主義）と一線を画していた⁷⁷。彼の考える社会主義とは「政治においてのみならず、倫理や経済においても、他者に制限されることなしに自分の望むことを行う自由であり、権力の許可を得たり恐れたりすることなしに自分の望むことは何でも行える解放であり、そして平等である」⁷⁸状態だった。そしてルドルフ・シュタムラーの表現を用い、真の社会主義者の究極の目標とは「自由意思を持った人々の共同体」⁷⁹だとして、国家による完全統制を説く共産主義とは異なる考え方を提示する⁸⁰。

この共産主義者に関して、ヤーシが反ユダヤ主義的であるとも指摘される⁸¹。実際、彼は革命回顧録の中で「共産主義者の指導者たちの少なくとも95%がユダヤ人であった」⁸²と述べ、「平均的な共産主義者が持つ主に合理主義的で不道徳的な属性は、歴史的なユダヤ型の属性と著しく似ている」⁸³と革命による社会の大混乱の原因を「ユダヤ人」に帰しているとも解釈可能な記述をしている。だが、彼は同時に「よく反革命団体で出されるような、ポリシェヴィズムが純粹にユダヤ人の産物であると

いう理論は全くの誤りである」⁸⁴と明言しており、この解釈は適切ではない。彼は同じ頃に「ポリシェヴィキのメンバーによる諸革命は4つの原因群の結果であった」⁸⁵と記したが、ここでも明確な「ユダヤ人」批判は見られない。

以上から、ヤーシはポリシェヴィキによる革命に関して、確かに革命に加担した「ユダヤ人」には否定的だったが、彼の主要目的は共産主義批判であり、「ユダヤ人」批判はそれを補強する題材として用いられているに過ぎないということが分かる。むしろ彼にとっては、封建的社会や第一次世界大戦、協商国の外交政策に呼応した民族解放の裏返しに存在する排他的ナショナリズム、「民主主義」的手法の軽蔑などから読み取れるように、「民主主義」の不在が問題となっているのである。

ここで、彼の「民主主義」論の問題点について、ポリシェヴィズム批判との関連で併せて指摘しておきたい。最大の問題は「民主主義」が実現された社会に対するユートピア的意識である。彼にとっての「民主主義」とは、ハンガリー（「封建制」が残存・前近代的・後進的）がヨーロッパ（西欧近代社会と同値で先進的）へと加入するための条件かつ理想だった。ゆえに「民主主義」に対する過剰で盲目的なまでの期待が見られ、「民主主義」そのものに対する考察は決して十分ではない。

また、「民主主義」実現後の社会運営方法の考察も不十分だった。ヤーシはポリシェヴィズムを「反民主主義的」と批判したが、改革方法や過程が異なっても現状を打破して（各々が考える）自由と平等が実現された理想郷の創出を目指す点や、理想が実現した社会の運営方法を抽象的にしか提示していない点で両者は類似していた。ユダヤ系知識人の社会主義・共産主義の理想社会実現に向けた変革への使命感とユダヤ教のメシアニズム的構図との類似性は度々指摘されるが⁸⁶、この意味においてヤーシの場合は社会変革の理念的根拠を「民主主義」に求めたと理解することも可能であろう。

3-3. ヤーシによる「ユダヤ人」像の設定

これまでの考察から、1920年代のハプスブルク君主国あるいはその中のハンガリーに関するヤーシの議論の中で登場した「ユダヤ人」とは次のようにまとめることができる。まず彼らは「封建制」と結びつく金融資本の主体であった。そして、自らもマジャル化して非マジャル系住民への同化を促す積極的な主体となり、非マジャル系住民の分離主義傾向を招いて、君主国解体の原因となった。その一方で、資本家の利益となる階級支配を打破することを主張して「民主主義」を軽蔑するポリシェヴィキ革命に加わった者もいた。ヤーシは、このような「ユダヤ人」を「民主主義」のハンガリーにおける成長を妨げる存在だと見なした。しかしその一方で、彼は農民や労働者を「民主主義」へと導くオピニオン・リーダー的存在の「ユダヤ知識人」が社会には必要だとも認識していた。

したがって、ヤーシによる「ユダヤ人」像の設定において重要な要因は言語や宗教ではなく、現実社会との関係性、すなわち「ユダヤ人」という表象とハンガリーの社会構造が抱える諸問題が結びついたことである。そして、この諸問題はハンガリーへの「民主主義」の導入と定着に密接に関係した。「封建制」との結合や非マジャル系住民の抑圧によって「民主主義」の導入が妨げられ、カーロイ政権の成立によって導

入されて定着するかに見えたが、協商国からの圧力でカーロイ政権は倒れ、「民主主義」的手法を軽視したボリシェヴィキ革命が起きてしまった。「民主主義」の導入と定着をめぐるいずれの過程にも「ユダヤ人」が関わっている。したがってヤーシは、ハンガリーにおける「民主主義」の実現を阻害する存在と促進する存在との両方に「ユダヤ人」を見出していたと考えられる。

結びに代えて

最後に、ヤーシの設定した「ユダヤ人」像の問題を二点指摘しておきたい。ひとつは、事実認識の問題である。先述のように、彼はガリツィアなど後背地のいわゆる「東方ユダヤ人」と農村における「ユダヤ人」を同一視し、ジェントリと「ユダヤ人」の高利貸が行政的・経済的に結びついて非マジャル系住民を抑圧する「封建制」を批判した。彼はこの点で「ユダヤ人」と「封建制」の問題を少数民族問題とも繋げて理解していたと言える。一方、確かに中央では貴族がユダヤ系の大金融資本と結びついていたが⁸⁷、この資本家と「高利貸」は決して同一のものではなく、ヤーシ自身が一般的に流布する「ユダヤ人」イメージを元に議論を組み立てたのではないかとも批判できよう。また、先述のように二重制期のハンガリーでも反ユダヤ主義は存在し、20世紀初頭には社会進出を続ける「ユダヤ人」との対立関係が生まれようとしていた⁸⁸。マジャル人と「ユダヤ人」との協調の視点のみから社会を論じるのは事実関係の単純化の誹りを免れない。

もうひとつの問題は同化「ユダヤ人」への批判に見られる矛盾である。ヤーシ自身がマジャル化した「ユダヤ人」であるが、彼がその点には言及せずに同化「ユダヤ人」と「封建制」との協力関係を批判した矛盾については以前から指摘されている⁸⁹。だが、彼の「ユダヤ人」論の問題点はそれだけに止まらない。彼の活動からも明らかなように、彼は「真剣に自由主義思想を取り入れ、諸々の少数民族の民族闘争に共感的である重要な少数派ユダヤ人」⁹⁰に自己同定していた。彼は「ユダヤ人」が仮にマジャル化したとしても、ハンガリー社会で優勢的な立場にあったマジャル系住民とは完全に同一化できないと見なしていたと考えられる。マジャル化した「ユダヤ人」を「半同化」⁹¹という表現を使いながら、「民主主義」との関係で「ユダヤ人」として取ってカテゴライズしているからだ。同様に考えると、マジャル系住民が優勢のハンガリー社会で大衆を「民主主義」へと導く「ユダヤ知識人」も完全なマジャル系住民にはなりえない。彼の考えを突き詰めると、「ユダヤ知識人」はマジャル系住民と非マジャル系住民との境界線上の存在であると自ら宣言していることになる。もちろん彼はこの境界性に言及しておらず、先進的な(彼の考えでは「民主主義」を知る)「ユダヤ知識人」が、彼らが後進的(彼にとっては「民主主義」を知らない)非「ユダヤ人」を導くという発想が、非「ユダヤ人」たるマジャル系住民と非マジャル系住民双方からの反発を招きかねない点への考察を欠いていた。

先行研究で指摘されてきたように、彼の「ユダヤ人」論は自身の改宗と同化という生い立ちに起因する自己意識の反映があると同時に、彼の生涯の政治課題であるハンガリーでの「民主主義」実現の問題へと繋がっていた。彼の「ユダヤ人」論の考察では、この複合性を念頭に置かねばならない。

- 1 本稿での地名は原則マジヤル語表記を用い、「ブダペスト」「トランシルヴァニア」などの慣用表記はそれに従う。正書法は当時の表記に従う。
- 2 彼の定義する「急進主義」とは「急進的な諸改革」を誓うことであり、「勤労中産階級による物質的・精神的・倫理的により高次な生産を志向した運動であり、全生産力を発展・組織化・不労所得排除へと向ける努力を政治的に支えることを強く希望する運動」であった。その担い手は「専門的な精神労働者」あるいは「勤労知識人」である。Cf. Jászi, Oszkár, „Mi a radikalizmus? (急進主義とは何か?)” Budapest, Országos Polgári Radikális Párt, 1918, 5-6, 17-18.
彼は1918年に‘a polgári radikálisizmus’に関して‘polgárság(市民性)’とは‘bourgeois’ではなく‘citoyen」と理解しており、本稿でもこれに従って‘polgár’を「市民」と訳す。
Cf. Jászi, Oszkár, „Proletárdiktatúra(プロレタリア独裁),” in *A kommunizmus kiltátalansága és a szocializmus reformációja: Válogatás politikaelméleti írásaiból*(『共産主義の絶望と社会主義の改革：政治理論の著作からの選集』), (Szerk. Gyurgyák, János, és Kővér, Szilárd, Budapest, Héttorony Könyvkiadó, 1989), 9.
- 3 詳しくは辻河典子「書評：Litván György, *Jászi Oszkár* (Budapest, Osiris, 2003) / *A Twentieth-century Prophet: Oscar Jászi 1875-1957* (Budapest& New York, Central European University Press, 2006)」『東欧史研究』29号、2007年、49-51。
- 4 Gyurgyák, János, *A zsidókérdés Magyarországon: politikai eszmétörténet*(『ハンガリーにおけるユダヤ人問題：政治思想史』), Budapest, Osiris Kiadó, 2001, 495-508.
- 5 例えば1990年3月20日にハンガリー科学アカデミー付属ユダヤ研究チームに招聘されたネタニエル・カツブルグの講演とその後の研究チームとの意見交換では、「ユダヤ人」という語の定義設定に一定の留保が与えられている。そのため、ハンガリーにおけるユダヤ史研究でユダヤ的アイデンティティを前面に打ち出すことを求める講演者に対し、多面的な視点を提示する発言者もいた。この点を踏まえ、本稿では引用の場合を除き、「ユダヤ人」と括弧付けで表記する。Cf. カツブルグ, ネタニエル(寺尾信昭訳)「ハンガリー・ユダヤ史研究の問題点：なぜハンガリーのドゥップノフやユダヤ人のセクフェーが出なかったのか?」, 『ロシア・東欧研究』第4号、2000年、227-248。
- 6 但し、ハンガリーで宗教の平等性が確認されてユダヤ教が承認されたのは1895年である。
- 7 Gyurgyák, *A zsidókérdés Magyarországon*, 212.; なお、マジヤル語はドイツ語やイディッシュ語を完全に駆逐したわけではなく、主にハンガリー東北部で、その後もユダヤ社会内部の日常語として残った。名前のマジヤル化も同化意志の表明として近代主義派から始まった。Cf. プレブク・アニコー(寺尾信昭訳)『叢書東欧9 ロシア、中東欧ユダヤ民族史』、彩流社、2004年、118.; ブダペストの近代主義派はハンガリーの中間階級の非「ユダヤ人」の間でさえも、マジヤル化を喚起するのに重要な役割を果たした。Cf. McCagg, William O., Jr, *A History of Habsburg Jews, 1670-1918*, Bloomington, Indiana UP, 1989, 190.
また、第一次世界大戦の前後を通じて近代主義派は都市の中心部で、正統派は第一次世界大戦後にハンガリーがその支配を失った地域で強力だった。Cf. *Ibid.*, 259.
- 8 1873年から始まった大不況の中で、農村では1848年の農奴解放以来の小規模農場経営の破綻と農民層の分解が一層進行した。Cf. Berend, Iván T., *History Derailed: Central and Eastern Europe in the Long Nineteenth Century*, London, University of California Press Ltd., 2003 188.
- 9 Romsics, Ignác, *Hungary in the Twentieth Century*, Budapest, Corvina, 1999, 57.; その主張と活動の展開はGyurgyák, *A zsidókérdés Magyarországon*, 314-331.; Gyurgyák, János, *Ezzé lett magyar hazátok: A magyar nemzeteszmé és nacionalizmus története*(『ハンガリーの祖国はこうなった：ハンガリーの国民意識とナショナリズムの歴史』), Budapest, Osiris, 2007, 142-149)にも詳しい。
- 10 1882年に北東部の町ティサエスラルで14歳のカルヴァン派の少女が行方不明となり、ユダヤ教の祭儀である過ぎ越しの祭りにキリスト教徒の血を使うために彼女が殺されたとして、ユダヤ教徒に疑いが向けられたことが端緒となった。Cf. ルカーチ, ジョン(早稲田みか訳)『ブダペストの世紀末——都市と文化の歴史的肖像——』、白水社、1991年、236。
- 11 Fischer, Rolf, *Entwicklungsstufen des Antisemitismus in Ungarn 1867-1939: die Zerstörung der*

- magyarisch-jüdischen Symbiose*, 1988, 56.
- 12 プレブク『ロシア・中東欧ユダヤ民族史』、132。
 - 13 Gyurgyák, *A zsidókérdés Magyarországon*, 243-246.
 - 14 Pók, Attila, “Scapegoats in Post-World War I Hungarian Political Thought,” *Hungarian Studies*, vol. 14, no. 2, 2000, 203-204. ; 同論文ではヤーシも「ユダヤ人」をスケープゴートにしたと解釈可能だという記述がある (p.205)。
 - 15 在地の大地所有者に支援された準軍事組織によるタナーチ革命への参加者やユダヤ人への暴力行為。犠牲者には革命への参加を問わず多くのユダヤ人が含まれた。人数は1000人超とされるが、正確な統計値は不明である。Cf. Romsics, *Hungary in the Twentieth Century*, 110, f.38.
 - 16 1920年時点のハンガリーでマジダル語が母語だと申告した者は約715万人で全人口の89.6%を占めた。Cf. A Magyar Kir. Központi Statisztikai Hivatal, *Magyar statisztikai évkönyv*(『ハンガリー統計年報』), XXVII, XXVIII, XXIX, XXX, 1925, 14.
そのため、マジダル系住民の民族構成上の優位が確保されるようになり、それまで「ユダヤ人」に求められてきたマジダル化の推進役としての役割を必要としなくなったことも指摘できる。Cf. プレブク『ロシア・中東欧ユダヤ民族史』、172。
 - 17 Gyurgyák, *A zsidókérdés Magyarországon*, 127-131.
第一次世界大戦前ほどの堅固な体制ではなかったが、極右勢力からの脅威への対抗でもあった。Cf. Mendelsohn, *The Jews of East Europe between the World War*, 104.
 - 18 „XIV. törvénycikk: a tudományegyetemekre, a műegyetemre, a budapesti egyetemi közgazdaságtudományi karra és a fogakadémiákra való beiratkozás szabályozásáról szóló 1920. évi XXV. törvénycikk módosításáról (第一六号法: 大学・工科大学・ブダペスト大学経済学部・歯学アカデミーへの適切な入学に関する一九二〇年第二五号法の修正について),” *Magyar törvénytár: 1928. évi törvénycikk* (『ハンガリー法令集: 一九二八年の法令』)(Térffy, Gyula jegyzetekkel ellátta), Budapest, Franklin-Társulat, 1929, 330-332.
 - 19 プレブク『ロシア・中東欧ユダヤ民族史』、175。
 - 20 „XXII. törvénycikk: az országgyűlés felsőházáról (第二二号法: 国会 upper house について),” *Magyar törvénytár: 1926. évi törvénycikk* (『ハンガリー法令集: 一九二六年の法令』)(Térffy, Gyula jegyzetekkel ellátta), Budapest, Franklin-Társulat, 1927, 240-241.
 - 21 Gyurgyák, *A zsidókérdés Magyarországon*, 501.
 - 22 „A zsidókérdés Magyarországon: A Huszadik Század körkérdése (ハンガリーにおけるユダヤ人問題: 『二〇世紀』の世論調査),” in Hanák Péter (sajtó alá rendezte), *Zsidókérdés asszimiláció antiszemizmus: Tanulmányok a zsidókérdésről a huszadik századi Magyarországon* (『ユダヤ人問題 同化 反ユダヤ主義: 20世紀のハンガリーにおけるユダヤ人問題に対する諸研究』), Budapest, Gondolat Kiadó, 1984, 15.
 - 23 *Ibid.*, 79.
 - 24 マジダル語において民族に相当する原語表記は存在せず、かつては‘faj(人種)’で表現していた。Cf. 家田修「ハンガリーにおける新国民形成と地位法の制定」、『スラヴ研究』第51号、2004年、163、注22。
 - 25 „A zsidókérdés Magyarországon,” 79.
 - 26 *Ibid.*, 80-81.
 - 27 *Ibid.*, 83.
 - 28 *Ibid.*
 - 29 *Ibid.*, 84.
なお、ここで見られるヤーシの回答と同様に「ユダヤ人」の同化を肯定した見解は、戦間期ハンガリーでも雑誌『二〇世紀』の流れを汲む左派知識人の一部に残り、彼らは農村における土着的伝統を重んじる人民派と1930年代にかけて都市派對人民派の論争を展開していくこととなる。
 - 30 *Ibid.*, 84.
 - 31 *Ibid.*, 85.
 - 32 *Ibid.*, 85-86.

- 33 *Ibid.*, 86.
- 34 Jászi, Oscar, *The Dissolution of the Habsburg Monarchy*, Chicago, The University of Chicago Press, 1929 (reprinted in 1961), 239. ; この部分は ‘far less racial problems than the sickness of a society’ の訳であるが、本論文の筆者は ‘racial’ は先の注で記した ‘faji’ と同義であるとの解釈に立つ。
- 35 その背景事情としては、特にアウスグライヒ以降、急速に資本主義化を進めた君主国内での自由貿易を介した関税連合が最終的に失敗したことに触れた中で、「大衆が経済的に不満足であったことが民族分離と自民族中心主義傾向の成長との主な促進要因のひとつとなった」と分析されている。Cf. *Ibid.*, 212.
- 36 ハンガリーでは自営業の54%の人が1910年には「ユダヤ人」であり、「ユダヤ人」の36%以上が工業・貿易業・運輸業の分野で自営業となった。銀行業や運輸業の職員や従業員に占める「ユダヤ人」の割合は53%、工業では43%であった。1910年段階で、医師のほぼ半数、弁護士45%、ジャーナリストの42%、個人技術者の38%、役者の23%が「ユダヤ人」であった。「ユダヤ人」の73%以上が工業や手工業、商業や銀行業で、その他の11%が通信機関や自由知識業で働いていた。このことから、農業以外の諸産業、特に銀行業・運輸業や医師・弁護士などの専門職でユダヤ人の進出が著しかったことがうかがえる。Cf. Berend, *History Derailed*, 202.
- 37 Jászi, *The Dissolution of the Habsburg Monarchy*, 176.
- 38 *Ibid.*, 171.
- 39 *Ibid.*, 170.
- 40 *Ibid.*, 219. ; ヤーシは別の箇所では「疲弊した農民が、害悪の真の源としてのハンガリーにおける封建主義によって提示されたユダヤ人高利貸にすっかり依存していた。」と記している。Cf. *Ibid.*, 235.
- 41 *Ibid.*, 234.
- 42 なお、ヤーシは「東方ユダヤ人」を農村で「封建制」と結びつけた「ユダヤ人」に含めているため、彼らを特別に取り上げた議論は行っていない。例えば、1901年のバルタの著書『カザール人の地にて』ではハンガリー東部の農村の、また、ポーランド人社会主義者のダシンスキの証言ではガリツィアの農村の各事例を参照しながら、「ユダヤ人」が高利貸や酒屋を営んで、農村を経済的困窮のみならず、倫理的・社会的退廃へと追いやっていると批判した。Cf. *Ibid.*, 234-239.
- 43 *Ibid.*, 175.
- 44 *Ibid.*, 174.
- 45 *Ibid.*
- 46 *Ibid.*
- 47 *Ibid.*
- 48 *Ibid.*
- 49 *Ibid.*, 173-174.
- 50 *Ibid.*, 175.
- 51 *Ibid.*, 174. ; 同頁には「彼ら(=ユダヤ人)は常に、民族的伝統や土地に対する本能的愛着によって検証されてはいない知的合理主義の中で、彼らの新たに受容された立場を誇張したり、最も輝かしい色をつけたりする傾向があった。」とある。
- 52 以下この段落は *Ibid.*, 173.
- 53 *Ibid.*, 274; この国勢調査では国内人口比5%の91万1000人の「ユダヤ人」が居住しているとされ、ヤーシは「ユダヤ人」全体を仮に別個の民族として扱っていればマジダル系による多数派形成はなかっただろうと分析している。Cf. *Ibid.*, 275, fn.1.
- 54 *Ibid.*, 274-275.
- 55 「ユダヤ知識人」とは限定していないが、「急進主義」の精神的基礎としての専門的な精神労働者については革命以前から主張している。Cf. Jászi, „Mi a radikalizmus?” 6-7.
- 56 Jászi, Oszkár, *Revolution and Counter-revolution in Hungary*, London, P.S. King, 1924, 189.
- 57 別の論考では「解放された大衆、つまり創造的な知識人集団と共にある農民や労働者は、ナショナリストや資本家による帝国主義の支持者よりもずっと明確に正義を知覚している。」と書かれている。Cf. Jászi, Oszkár, “The Irresistibility of the National Idea,” in *Homage to Danubia* (György Litván (ed),

- Lanham, Maryland, and London, Rowman & Littlefield—以下 *HD*), 1995, 29.
- 58 Jászi, *The Dissolution of the Habsburg Monarchy*, 176.
- 59 *Ibid.*, 176.
- 60 ミュンヘンを拠点とする雑誌「水平線」に1955年と1957年に計4回にわたって掲載された。
Cf. „Emlékeimből: Szülőföldemen 「我が記憶から: 故郷にて,」 *Látóhatár*, 1955. no.2., 132-140. (*Jászi Oszkár publicisztikája*(『ヤーシ・オスカル政治著作集』) (Válogatta, szerkesztette és a jegyzeteket készítette Litván, György, és Varga, F. János, Budapest, Magvető, 1982—以下 *JOP*), 541-591): „Emlékeimből: Szülőföldemen,» *Látóhatár*, 1957. no.1-2., 59-70.; „Emlékeimből: A Huszadik Század megindul Herbert Spencer égisze alatt,» *Látóhatár*, 1957. no.3., 135-139.; „Emlékeimből: Elmélet és gyakorlat között,» *Látóhatár*, 1957. no.4. 208-217.
- 61 *JOP*, 547.
- 62 *Ibid.*, 547-548.
- 63 *Ibid.*, 548.
- 64 *Ibid.*, 548-549.
- 65 例えば1920年6月19日のカーロイ宛の手紙で、ユハース=ナジ・シャンドルがウィーンに到着し、それはヤーノシ・ゾルターンとホック・ヤーノシュとの連帯を意味するとヤーシは伝えたが、その中で、亡命者に「大いに印象づける役割」があることを記す。その役割として、ホックが「自由主義のカトリック派」、ヤーノシが「自由主義のカルヴァン派」、ユハース=ナジが「カルヴァン派の小農民」を意味するとヤーシは指摘したが、彼自身に関しては「反失地回復主義者の政治家と連邦国家」と信仰面には言及していない。この手紙の中で他に信仰への言及がない人物は、カーロイ（「近代的なハンガリー全体」）とナジ・ヴィンツェ（「進歩主義的な小市民」）である。Cf. Jászi, Oszkár, „Károlyi Mihályhoz (カーロイ・ミハーイへ),» Wien, 1920. VI. 19., *Jászi Oszkár válogatott levelei* (『ヤーシ・オスカル書簡選集』) (Összeállította, jegyzetekkel ellátta Litván, György, és Varga, F. János, Budapest, Magvető, 1991), 247.
- 66 Hanák, Peter, *Jászi Oszkár dunai patriotizmusa* (『ヤーシ・オスカルのドナウ愛国主義』), Budapest, Magvető Könyvkiadó, 1985, 10.
- 67 Pelle, János, *Jászi Oszkár : életrajzi, eszme- és kortörténeti esszé* (『ヤーシ・オスカル: 経歴と思想史・個別事例史の論考』), Budapest, XX. Század Intézet, 2001.
- 68 但し同書には学術的ではなく政治的なパンフレットであるとの批判もある。Cf. Bihari, Péter, „Pelle János: Jászi Oszkár –Életrajzi eszme- és kortörténeti esszé,» *BUKSZ*, 14 évf. 3 szám, 2002, 262.
- 69 Gyurgyák, *A zsidókérdés Magyarországon*, 485.
- 70 亡命後のヤーシは1918年10月の革命における共和制や土地改革といった試みを「十月主義」と呼び、それをハンガリーに再現することを目指して1920年代前半にかけて積極的な政治活動を行った。ドイツ語及び英語で出版された革命回顧録は列強に対するプロパガンダ活動の代表例と言える。1925年の渡米後も直接の政治活動は行わなかったものの、ハンガリーのホルティ体制への批判は続けられた。
- 71 Jászi, *The Dissolution of the Habsburg Monarchy*, 234.
- 72 *Ibid.*, 220.
- 73 *Ibid.*, 171.
- 74 *Ibid.*, 172.
- 75 Jászi, *Revolution and Counter-revolution in Hungary*, vii.
- 76 *Ibid.*, 171.
- 77 例えば、「急進主義」について論じたパンフレットの中で、共産主義的な社会主義が社会主義の唯一可能な構想というわけではないと述べている。Cf. Jászi, “Mi a radikalizmus?,” 13.
- 78 Jászi, Oszkár, “The Present Crisis of European Marxism,” in *HD*, 12.
- 79 *Ibid.*, 12.
- 80 亡命直後の1919年に彼は共産主義批判の論考を執筆しており、Jászi, Oszkár (Szerkesztette és bevezetéssel ellátta Kende Péter), *Marxizmus, vagy liberális socializmus* (『マルクス主義、あるいは自由主義的社会主

- 義)], Párizs, Magyar Füzetek, 1983, 3-137.に収められている。
- 81 近年でもペレが同書では反ユダヤ主義的な攻撃がなされていると指摘する。Cf. Pelle, János, „Jászi Oszkár és a zsidókérdés (「ヤーシ・オスカーとユダヤ人問題」),” *Múlt és jövő*, 2001, 1., 74.
- 82 Jászi, *Revolution and Counter-revolution in Hungary*, 122.; この時期の共産主義勢力に関する推計には諸説存在するため、あくまでもヤーシ個人の認識と理解すべきだが、1919年のタナーチ政権にユダヤ系の出自を持つ者が多数関与していたことが広く認識されていたために、「白色テロル」が誘発されたのは確かである。Cf. ロスチャイルド, ジョゼフ (大津留厚 監訳)『大戦間期の東欧——民族国家の幻影——』、刀水書房、1994年、194。
- 83 Jászi, *Revolution and Counter-revolution in Hungary*, 122.
- 84 *Ibid.*, 123.
- 85 Jászi, Oszkár, “The Crisis of European Democracy,” in *HD*, 41.
- 86 例えばブレブク『ロシア・中東欧ユダヤ民族史』、147-148。
- 87 ユダヤ系巨大資本とマジダル系貴族の結びつきの一例として、20世紀初頭に88人の伯爵と64人の男爵が、様々な製産業や鉄道会社、銀行の理事会や管理理事会に出席し、その多くが複数の会社の理事会に出席していたことがある。Cf. Berend, Iván T. and Ránki György, *Economic Development in East-Central Europe in the 19th and 20th Centuries*, New York and London, Columbia UP, 1974, 164.
- 88 「ユダヤ人」の商業活動から自由業への進出がジェントリとの対立関係を招いた。Cf. ロスチャイルド『大戦間期の東欧』、192。
- 89 R.A.Kann, “Hungarian Jewry during Austria-Hungary's constitutional period (1867-1918),” *Jewish Social Studies*, vol.7, no.4, 1945, 367.
- 90 Jászi, *The Dissolution of the Habsburg Monarchy*, 176.
- 91 *Ibid.*, 175.

Oscar Jászi's Discussion on the 'Jews' —Relationship between 'Democracy' and the Society of Hungary

Noriko Tsujikawa

Oscar Jászi (Jászi Oszkár: 1875-1957) was a leading figure of the progressive intellectuals, among whom some socialists were in Budapest at the turn of the 20th century. He claimed that Hungarian society, which still had the feudal system, should be democratized, and gradually committed himself in political movements. The progressive or socialist intellectuals participated in the republican revolution of October 1918 and/or the communist revolution of March 1919, and then fled Hungary in the fear of the counter-revolution after the communist regime collapsed. Jászi became their virtual leader and tried to overthrow the counter-revolutionary Horthy regime, which held power until 1944.

This research paper discusses as what Jászi represented the 'Jews' in the context of the society of the Habsburg Monarchy, mainly of Hungary. According to some viewpoints on the 'Jewish' problems, it seems to be stated that definitions of the 'Jews' can vary in what context they are discussed.

As defeated in WWI, only about one-third of the historical territory of Hungary remained within its border. People who had 'Jewish' origin had assimilated into Hungarian (i.e. Magyar) society and had increasingly advanced their participation in the Hungarian society since the second half of the 19th century. The legal equality of the citizens, regardless of their religion, was consummated in 1867, and those 'assimilated Jews' played significant roles during the revolutions of 1918-1919. Therefore, after the revolutions collapsed, the 'Jews' were accused as scapegoats of the dissolution of historical Hungary. When the political situations were not settled during the counter-revolutionary period, the 'White Terror' prevailed around Hungary and many 'Jews' were regarded as collaborators of the revolution (especially the communist regime of 1919) and were prosecuted by radical nationalists. Besides, some 'anti-Semitic' policy appeared in Hungary during the interwar period. One of the most representative examples was so-called *Numerus Clausus*, which virtually limited the 'Jews' from the higher education. This political tendency apparently indicated the termination of co-exist between the 'Jews' and the Magyars since the second half of the 19th century.

Jászi was one of those 'Jews.' His family converted from Jewish to Calvinist in his child days and he played significant roles in the intellectual society at the turn-of-the 20th century and in the revolutionary government of 1918. While it seems that he avoided in pondering his own 'Jewish' carrier, Jászi severely criticized 'Jews' in some of his writings, regardless of his 'Jewish' background. Previous studies have mentioned this ambivalent attitude; some have considered it as 'anti-Semitic,' others have discussed that this attitude was a common feature among the second generation of the assimilated 'Jews.' However, such researches have not discussed further what Jászi meant by the images of the 'Jews.'

Jászi solidly discussed the 'Jewish' problems as social matters. He mentioned the 'Jews'

as the people who assimilated into the Magyars, the dominating nation in Hungary at that time. He regarded the 'Jews' as the capitalists, who had been connected with 'feudal' aristocracy politically and economically, establishing the class dominations together. According to him, the capitalization of the Monarchy failed, and in Hungary the capitalism, having developed from the middle of the 19th century, triggered nationalism and exclusivity among nations. Moreover, he criticized that the 'Magyar-assimilated Jews' contributed to the Magyar nationalism and actively endeavoured to promote the assimilation of the non-Magyars, only to lead them to separatism.

In terms of 'democracy,' Jászi criticized 'feudal' system in the society of the Habsburg Dual Monarchy (naturally also in Hungary), representing the 'Jews' as a barrier to 'democratization' in Hungary. Besides, he blamed liberalism in Hungary that it had communication with 'feudalism,' mainly at the financial level. He also found a fault in 'anti-democratic' characters of Communism, which aspired to overthrow the 'feudal' system. According to Jászi, the Magyar-assimilated 'Jews' could be connected with all mentioned above, and he represented the 'Jews' as the factor which hindered Hungary from realizing 'democracy.'

In the meantime, Jászi highly valued on the role of the 'Jewish intellectual workers,' who struggled to introduce 'democracy' into Hungary. He identified himself and his group with those 'Jews.' However, it should also be noted that the 'Jewish intellectual workers' only could stand the borderline between the Magyars and the non-Magyars, if referring to Jászi's statement that the 'assimilated Jews' were in fact half-assimilated. He did not mention this ambivalence.

Even though, it can be concluded that Jászi regarded the 'Jews' both as the factor interfering and as promoting 'democratization' of the society of Hungary. Jászi's critics on the 'Jews' is not only the reflection of his ambivalent identity (having the 'Jewish' origin,) as some previous studies pointing out, but also should be considered in terms of his political destination (realizing 'democratic' Hungary.)